

主の光の中を歩もう

奨励	小原 克博【こはら・かつひろ】
奨励者紹介	同志社大学神学部教授
研究テーマ	キリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究

アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて幻に見たこと。
終わりの日に
主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち
どの峰よりも高くそびえる。
国々はこぞって大河のようにそこに向かい
多くの民が来て言う。
「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。
主はわたしたちに道を示される。
わたしたちはその道を歩もう」と。
主の教えはシオンから
御言葉はエルサレムから出る。
主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。
彼らは剣を打ち直して鋤とし
槍を打ち直して鎌とする。
国は国に向かって剣を上げず
もはや戦うことを学ばない。
ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

(イザヤ書 2章1―5節)

平和のビジョン

イザヤは南ユダ王国で活動した預言者でした。南ユダ王国では、日本の首相のように、比較的短い期間で王が変わることが多かったのですが、イザヤが生きていた時代の南ユダ王国は、ウジヤ王が長い期間にわたって統治しており、比較的安定した時代でした。ところが、本日とりあげた聖書の箇所ではイザヤは、安定した日常を挑発するかのよう「終わりの日」に起こる出来事を記しています。「終わりの日」という言葉は一体、何を意味しているのでしょうか。まず言えることは、これらの出来事は単なる未来予言でもなければ、現実逃避のための夢想でもないということです。

ここで記されている一つひとつの事柄は、非日常的な印象を与えます。たとえば、2節の「国々」、3節の「多くの民」という言葉は、伝統的なイスラエルの理解によれば、神によって裁かれるべき敵対する国々であり、人びとのことです。彼らが徹底して裁かれることによって、イスラエルの民は自分たちの神の偉大さを知るという表現も旧約聖書のなかにはしばしば見られます。しかし、イザヤがここで語っているのは、敵対するはずの人びとさえも、終わりの日には神の教えと神の言葉を聞くためにエルサレムにやってくるということです。もちろん、ここで強調されているのは、イスラエルの民の他の国々に対する優越ではなく、人間の敵対意識を越えてすべての人びとを招く神の圧倒的な力です。しかも、その神のもとに集められた人びとが「剣を打ち直して鋤とし槍を打ち直して鎌とする」と語られています。戦いのための武器を、生活のために必要な平和的な道具に作り変えるということです。そして、「国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない」（4節）という言葉は、まさしく戦争放棄の状態を語っています。

これらの預言者のヴィジョンは、一方ですぐには実現しそうにない非日常的な側面を表しています。しかし、他方、この平和のヴィジョンは、あたかも「棚からぼたもち」のように、ただ口をあんぐりと開けて待っているべきものではなく、はっきりと現在における責任との関係で語られています。それを端的に示しているのが5節の言葉です。「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」。今、主の光の中を歩むことが、預言者によって示された平和のビジョンに目を開き、そのビジョンに生きることだということです。この旧約聖書的な発想は、はっきりとした形で教会のなかに受け継がれてきました。教会は、イエス・キリストの十字架と復活、そして聖霊降臨の出来事を通じて、かつて預言者たちが語った終わりの日の出来事がごく身近に迫っていることを感じました。教会に呼び集められたのは決してユダヤ人だけではありませんでした。そこには、かつて激しく敵対していた諸国民、諸民族が呼び集められていました。だからこそ初期の教会は、自分たちが、あのイザヤの預言を現実にも担っている平和の民であるという自覚に固く立っていたのでした。

平和の民であること、それが主の光の中を歩むことの証しに他なりません。今、すでに主の光の中に入れられていること、そしてその中を歩み続けなければならないことが、教会のなかを見渡すだけで実感をもって知ることができたのでした。お互いに侮辱し合っていた間柄の者たちが共に食事をするなど、以前なら考えられなかったことだったからです。もちろん、人間的な敵対意識・差別感情が教会のなかですっかりなくなっただけでなく、そうではありません。パウロがガラテヤの教会のなかに見ていたように、律法を守るべきかどうかという問題をめぐって、ユダヤ人と異邦人の対立が、しばしば激しさを増していました。ユダヤ人たちは、異邦人も律法をしっかりと守るべきだと考えていました。律法とはヘブライ語でトーラーと言いますが、この同じトーラーという言葉が、今日の聖書のなかにも出てきています。それは、3節にある「主の教え」の「教え」という言葉です。イザヤの預言では、主の教えを諸国民が慕い、そのもとに一つにされている様子が描かれています。敵対する人びとに対するパウロの主張も、まさにこの預言者のヴィジョンに基づいたものでした。主の教えは、すべての人びとを平和的に一つにするものであって、選別のための基準ではないということをパウロは繰り返し語りました。だから、以前のような敵対関係から離れ、すでに主の光の中に置かれていることを思い起こしなさい、と聖書は語ります。たとえば、エフェソの信徒への手紙5章8―10節では次のように語られています。「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。――光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。――何が主に喜ばれるかを吟味しなさい」。

生きた光

このように聖書は、光について多く語っています。「主の光」、「光の子」という表現だけでなく、聖書の随所に、神や信仰者を語るうえで、光に関する表現が用いられています。それは非常に単純な誰にでも分かりやすい言葉であるようですが、聖書が記された時代に人びとが光という言葉で思い巡らした対象と、現代の私たちが考える光とは決して同じではないでしょう。エジソンが発熱電灯を発明し、それが夜を照らす光として用いられ始めたのは、20世紀になってからです。それ以前の世界では、光と言えばまずは太陽の光でし、暗闇を照らすのは、焚き火やろうそくの炎のようなものしかありませんでした。しかし、たとえ小さくとも光がなければ、夜道を歩くこともできませんし、生活することもできません。それだけに、光の照らす中に身を置くというのは、当時の人びとにとって切実なことであったわけです。逆に言うと、光の中を歩むということの有り難さを実感できたということになります。

そのような時代に対し、私たちの生活はどのように変わってきたのでしょうか。エジソンの発明以降、まだ100年もたないうちに人類はさまざまな光を作りだしてきました。現代の都市は眠らない都市であると言われています。夜中であっても、暗々（こうこう）と人工的な光が町を照らし続けています。夜中でも昼間のように活動できることは、確かに人間に大きな安心を与えたと言えるでしょう。しかしその反面、不眠不休の現代社会は人びとに大きなストレスを与えると同時に、社会にまだ残された闇の部分から目をそらさせることになりました。圧倒的な明るさの中に身を置くことによって、社会の暗闇の部分に視線を向ける感性を失いつつあると言えるでしょう。

しかし、人類が作りだしたのは、夜の町を照らす光だけではありません。一瞬にして何十万人もの命を奪い去ることのできる光も、人間の手のなかから生みだされたものです。その兵器は、太陽に比べることのできるくらい大きな光を放ちますが、太陽のように命を育み養うのではなく、命を脅かし、命を奪い取ります。そのような光を指して、「光の中を歩もう」と声高に言うのが、現代の核推進論者の声です。彼らは、核兵器という光の中を歩むことによって、平和がもたらされると信じています。現代の日本の政治家のなかには、原子力を「打ち直して」核兵器にしようとする人々もいます。核兵器こそが自国の平和維持のための防壁になるという声が公に出されるような時代に、私たちは生きています。

このように、20世紀において人類が手にしてきたさまざまな光のことを考えると、聖書のなかにある光という言葉をただノスタルジーをもって眺めるというわけにはいきません。聖書のなかで示されている光、つまり、私たちがその中を歩みなさいと言われている光が、人類の生み出した人工的な光の中でかき消されてしまっはならないからです。アドベントの時期、私たちが身に受けるべき光を思うとき、自ずとイエス・キリストの誕生のことを思い浮かべます。ヨハネによる福音書の冒頭には「初めに言（ことば）があった」という有名な言葉がありますが、それに続いて1章4―5節で次のように記されています。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」。イエス・キリストの光は世の暗闇を一掃してしまう巨大な光としては描かれていません。むしろ、暗闇にかき消されてしまうかのような、世の中の喧噪に埋もれてしまうような光の姿が、マタイによる福音書、ルカによる福音書の誕生物語からもうかがうことができます。ルカによる福音書によれば、イエスは飼い葉桶の中に寝かせられています。しかし、この光からすべてが始まっていくのです。

『風の谷のナウシカ』における闇と光

暗闇の中の光という聖書のイメージを考えるとときに、私がしばしば思い起こすのは「風の谷のナウシカ」のクライマックスです。映画「風の谷のナウシカ」は多くの人が観たことのある、スタジオ・ジブリの代表的な作品の一つだと思います。この映画は原作となっている全7巻の漫画の冒頭部分に過ぎません。宮崎駿の深遠な世界を知るためには原作の漫画を読む必要があるのですが、その最終刊で、ナウシカが旧時代の先端科学が残した知恵、科学者の意識の集合体と論争する場面があります。科学の知恵が「人類はわたしなしには亡びる」と語るのに対し、ナウシカは「それはこの星がきめること」と答えます。以下、次のように続いています。

ナウシカ「王蟲（オーム）のいたわりと友愛は虚無の深淵から生まれた」
科学者「お前は危険な闇だ。生命は光だ！！」
ナウシカ「ちがう。いのちは闇の中のまたたく光だ！！」

（宮崎駿『風の谷のナウシカ7巻』徳間書店 1994年 201頁）

詳細は実際の漫画で味わっていただくしかありませんが、ナウシカの生命観のなかには聖書が語る暗闇の中の光に通じるものがあると思います。かつて、カール・バルトという神学者は「聖書を読むように新聞を読み、新聞を読むように聖書を読みなさい」と語りましたが、漫画大国・日本では「聖書を読むように漫画を読み、漫画を読むように聖書を読みなさい」と大胆に読み替えてもよいかもしれません。いずれにせよ、私が言いたかったのは、聖書が示そうとしている闇と光の真実は、聖書のテキストを越えて、私たちの日常のなかにも、考えるための類例を見いだすことができるということです。

響き合うリズム

イエス・キリストの光は、世の暗闇を一掃してしまう巨大な光としては描かれていないことを先ほど話しました。しかし、光の大きさが本質的な問題ではありません。大切なのは、神が与えてくださるこの光にどれだけ響き合うか、ということです。響き合うという言い方は、光に関してはおかしいかもしれませんが、いくつか例を挙げてみたいと思います。現代物理学によれば、光は粒子性と波動性をもったものとして理解されています。光だけでなく、自然界の多くのものも固有の波、リズムをもっていることが分かっています。ただし、それらはまったく機械的な繰り返しをしているのではなく、微妙に揺らいでおり、それが自然の美しさを作りだしているようです。たとえば、海の波は一回一回、決して同じ形をしていませんし、また、さざ波の音は同じ音の反復ではありません。そのような揺らぎのあるリズムを見たり聞いたりすることによって、私たちは自分のなかにある生命のリズムを逆を感じとり、また、その本来のリズムを回復したりすることができます。心が傷ついて、感傷的になりがちなとき、何時間も海を眺めるとするのは無意味なことではなく、人間の生命力の回復に大いに関係があります。私たちが、パチンコ屋のネオンのような規則的な光の点滅よりも、暗闇の中で揺らいでいるろうそくの炎に心を引きつけられるのも同じような理由によるのです。

「主の光の中を歩もう」という言葉において、私たちは自分自身の生命的リズムを回復し、実感させてくれる生きた光を知るべきではないのでしょうか。その光は、私たち自身の命のあり方に目を向けさせるだけでなく、最終的に、その命の源である創造者なる神へと目を向けさせることになるのです。私たちは1週間や1年という繰り返しを暦に従って生きるだけでなく、その繰り返しのなかで主の光の救済史的リズムに呼応していく必要があります。ユルゲン・モルトマンという神学者は、このリズムのことを「メシアのリズム」と呼んでいます。主の光の中を歩むとは、メシアのリズムに従って生きることだと言うこともできるでしょう。クリスマスのときも、私たちににとっては単に年間行事の一環ではなく、繰り返す度にそこに引き込まれて、メシアのリズムに呼応し、それに生かされている自分を確認するときに他なりません。

終わりの日に

このように「主の光」のもつ意味の広がりを知ったうえで、イザヤの言う「終わりの日に」という言葉に還っていくことができます。それは原文に忠実に訳せば、「日々の背後に」「日々裏側で」という意味をもっています。それは次のような二重の意味に解釈されるでしょう。一つは、ヘブライ人的な時間理解に従って、それを目の前にある過ぎ去った日々の反対側に待ちかまえている将来の時、という理解です。この理解に終末論的な視点を加えれば、「終わりの日に」と訳すことも可能です。もう一つの解釈は、まさに私たちが今、経験している日常的な日々の隠された次元において、ということです。時間的な将来のことだけでなく、私たちが主の光に照らされていなければ見ることのできない、隠された神の真実に目を向けることがここで促されています。その隠された神の真実の躍動に響き合っていくことが、主の光の中を歩むという呼びかけの声となっていくのです。

この世の暗闇は主の光を理解しませんでした（ヨハネによる福音書1章5節参照）。しかし、私たちは、暗闇の中でまたたくこの光を理解し、この光と響き合う存在として、主の光の中を歩みたいと思うのです。

2012年12月12日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント讃美礼拝奨励」記録